非漢字圏の日本語学習者の漢字熟語の音読力の定着に関する考察

Research on Maintaining Reading Comprehension of Compound Kanji Words for Non-Kanji Background Japanese Learners

愛甲　瑞枝※
Mizue Aiko※

要旨
　コンピュータでのタイピング、音読など、漢字の読みの力の必要度は高い。特に熟語語彙では撥音、長音などの正しい音読ができない学習者もよく見られる。本研究では学習した熟語語彙の定着を図るため、熟語の読みの定着に影響を与えると思われる要因を探求した。10 の分野に分けた 60 の熟語語彙について熟語の読み、意味、使い方、それぞれの熟語に含まれる漢字の訓読みの調査をオンライン授業にて海外在住の日本語学習者を対象に行った。結果、熟語語彙の読みはその熟語の意味を理解することでより定着率が上がることがわかった。訓読みや熟語の難易度は熟語語彙の読み、意味の理解への影響度は高くなかったが、分野によってよく記憶されているものが異なった。教材でトピックとして取り上げられ、何度も使い込んだものが難易度の低い語彙より定着率が高かった。また、熟語語彙の前の単漢字の理解が熟語語彙の読み、意味の定着に特に影響を与えていることから、今度の学習につなげられるよう改善策を思案した。

キーワード：漢字　熟語語彙　意味　定着率　分野

1．はじめに

　漢字圏の日本語学習者の漢字習得の難しさはよく議論に挙がる。学習漢字の多さ、読み方の煩雑さ、漢字の構成の複雑さ、習得すべき項目の多さなどが理由としてあげられる（有山・落合, 2012）。また、漢字を暗記したとしても、それを維持するのに困難さを感じる傾向があり（豊田, 1995）、定着は難しい。加納（2016）が漢字の読み、書き、構成、運用力などについて上級レベルの学習者にCan Do調査を行い、漢字の読みと意味の理解に関してはある程度自信が見られるのに対し、書きについては評価が低かったと言う結果からも、学習項目によって得意、不得意分野は上級者でも見られる。実際手書きをする機会が少ないこと、パソコン等で入力する際にも正しい読みの知識がなければ入力ができないこと、日常生活、大学等での読みによるインプットの必要性など、実用性や学習者の負担を考慮すると、読む力の強化に特に必要性が高いと思われる。また、訓読みの語彙が理解でき、正しく音声化することができても、熟語になるとその音読力が落ちるケースも多々見られる。柳田（2011）の

※日本経済大学経済学部商学科

研究でも、学習が進むにつれ、導入漢字や語彙がより複雑になり、学習漢字が増加することによって記憶維持がさらに困難となり、熟語の読みや意味の習得の難易度をあげていることが指摘されている。本研究では熟語語彙の読みの定着の強化を目的に、熟語の読みと意味の理解に焦点を当て、テストと調査形式で定着に有効と思われる分野や単漢字の知識との関連、導入方法などを検証していく。

２．先行研究

２.１　単漢字、熟語と語彙の学習

漢字の読みの強化にあたり、課題となるのは覚えなければならない漢字の量である。漢字は訓読みと主に音読みで熟語として使われるときでは読み方が変わる。音読みだけでも複数存在する漢字もある。さらに同じ漢字でも組み合わせにより読み方が変わるため、熟語の読みに不安を抱く学習者は多い（Rose, 2013）。同じ漢字を使う熟語は数多く、訓読みと熟語の両方を認識するのはかなりの負担となる。そこで漢字語彙学習において何を優先するべきかを考慮する必要がある。

熟語の漢字語彙と訓読みの導入に関しては様々な意見がある。藤田・山口（2011）は漢字語彙の種類を独立語と統合語と分けている。独立語とはその漢字一文字で言葉となりうるもの（例：金、愛）で、統合語とはほかの漢字と組み合わせて使われるのを通常とするもの（例：映、観）である。初級用の漢字教材では象形文字で単独で使われるものなどから導入されることが多く、藤田･山口（2011）の言うところの独立語であるので、訓読みから学習することになる。しかし、中村（2019）は訓読みの読み書きから導入するのではなく、語彙の音韻を修得してから漢字を示すべきであると、訓読み・熟語にかかわらず語彙の習得の優先を指摘している。だが、語彙をまず習得し、漢字が学習指導要領に従って導入される日本語話者とは違い、外国語としての日本語学習者は語彙と文字を同時に覚えていかなければならないことも多く、その負担は大きい。さらに、難易度が低い漢字、使用頻度が高い漢字はほとんど初級で学習するにもかかわらず、初級で導入される語彙は限られているため（徳弘,2007）、語彙を優先すると漢字のレベルが上がることになる。そのため、その語彙を学習する際ひらがなで導入されると、そのままひらがなで覚えてしまい、漢字のレベルが上がったときにその読みと書きの両方を同時に学ぶことになり、より負担となる。中村（2019）も、一つの熟語とそれに含まれる単漢字を同時に学習するには、字形、単漢字、熟語両方の意味、標記、単漢字の音訓読みなど覚えなければならない項目が多すぎると指摘している。よって、単漢字、熟語の難易度にかかわらず、語彙と同時に漢字の読みだけでも覚えることで、熟語の読み、訓読み及び熟語の意味の理解が促進されると思われる。

学習者の訓読みと熟語の漢字力の検証結果によると、訓読みは読めてもそれを含む熟語が読めないケースが多い。愛甲（2021）の検証でも、三分の二の学生が訓読みは読めてもそれを含む熟語を読めなかったという結果が出ている。しかし同時に、熟語の意味の理解には単漢字の意味の知識が貢献していることも同研究で証明されており、熟語の正確な読みと理解には少なくとも、語彙を知っていること、単漢字の意味を理解していることが必要であることが言える。さらに大和（2019）の研究では漢字語彙の正誤判断ができるかどうかを調査し、語彙に含まれる単漢字が難しくても、語彙の難易度が低ければ正解率が高いことが判明している。また、間違いが多かったのは漢字の字順を交代させた

ものであり、正誤判断は単漢字の意味を正しく理解しているかによるもので、読みには依存していないことが分かった。つまり、読めなくても語彙が正しいかどうかは単漢字の意味から判断しているのである。

以上から、語彙の難易度に応じて熟語を導入する際、難易度の高い漢字であっても導入し、単漢字の読み書きよりその意味を理解させることを優先することが必要であると思われる。さらにその漢字を使った学習レベル相応のほかの熟語の知識を広げていくことも有効であると思われる。そのためにも、導入する語彙の選択が重要となる。

2.2　語彙の選択

教科書などに記載されている学習漢字語彙の多さは学習にとって漢字習得を困難にさせる一因である。すべてを覚えるには負担が大きすぎるため、それぞれの単元で覚えるべき語彙の選択が重要となる。日本語学習者は通常象形文字のような比較的優しい漢字で、日常使うものから習い始める（Paxton, Simon ,2014）。徳弘（2007）は語彙の選択には頻度と需要の高い漢字とその語彙を優先的に考慮する必要があると主張している。日本語能力試験（JLPT）では「課題遂行に必要な、日本語の文字・語彙や文法に関する知識」（国際交流基金・日本国際教育支援協会, 2009, 6）が出題されている。例えばN5の目標は「基本的な日本語をある程度理解することができる」ことであり、「日常生活で用いられる基本的な漢字で書かれた定型的な語句」（国際交流基金・日本国際教育支援協会, 2009, 8）が必要な語彙・漢字とされる。徳弘（2005）は使用頻度や親密度など、データをもとに検証して漢字2,100字を抽出し、その漢字を含む語彙15,000語の語彙を選択したうえで、それらを概念やカテゴリーで分類した。抽象的なもの、人間活動、生産物などである。レベルを考慮して絞り込むと、JFスタンダード、B1レベル（仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について主要点を理解できる段階）の要求されているのは「主に家族、趣味や関心、仕事、旅行、時事問題など、本人の日常生活に関わる大部分の話題について、多少間接的な表現を使ってでも、自分の述べたいことを述べられるだけの語彙を持っていること」である。（国際交流基金・日本国際教育支援協会, 2009, 17）。また、有山・落合（2012）が初級学習者の日常生活において漢字に接触する場面を調査したところ、区役所などの書類や町の看板、表示、日用品、メールなどが上がった。さらに中村（2011）はこのような使用領域に加え、意味理解に役立つ語彙の派生語・接辞の理解、語彙の意味に含まれる文化的背景内容なども語彙選択で考慮するべきであると主張している。

日本語の学習目的、環境により必要な語彙の使用領域・頻度は変わる。それぞれのケースで学習段階に即した選択が重要な側面となる。

2.3　定着

熟語語彙や単漢字を学習してもその定着は難しい。「覚えること」と「定着させること」は学習者にとって別々のことであり、それぞれに困難を感じている。学習環境によっては短期間でたくさんの漢字を覚えなければならない状況が見込まれるが、その中でも覚えやすい漢字、そうでないものがある。栗原（2019）は単漢字について学習者の意見を集約し、覚えやすい漢字は形によって決まると主張している。画数が少なく、書きやすいもの、象形文字のようにストーリーで理解できるものを挙げ

ている。高瀬（2015）は抽象性の低さ、意味の理解のしやすさも覚えやすい漢字としている。

覚え方も定着に関連している。加地（2012）による検証によると、覚えやすいとされたイメージなどの視覚によって学習した漢字より、部首や構成など言語型の知識を使って覚えたほうが記憶を維持しやすい。富沢（2013）は漢字をパーツに分け、組み立てに注目して覚えたり、熟語の組み合わせに注目したりすることを有効としている。語彙の意味論の見解からは、歴史的・文化的な意味も触れたり、語彙をカテゴリー化して整理し、さらにそれらの語彙からそれに関連する語彙を連想させたりする方法、エピソード記憶の活用や既存知識との連結も有効であるとする調査報告もある（Shimizu & Green, 2002; 方, 2016; 山田・牧岡・玉崗, 2012）。

しかし、覚えても定着しなければ習得したとは言えない。覚えた漢字を定着させるためには短期記憶を長期記憶に移行させることが必要であるが、日本語を日常で使用して育った母国語者と違い、外国語としての日本語学習者が漢字を長期記憶化させるには有効な暗記法が必要となる。富沢定利（2013）の調査でも88%の学習者が覚えてもすぐ忘れてしまうと回答しているように、記憶維持に対する学習者の不安は否定できない。藤田・山口（2011）によると独立語は単独で記憶されるのに対し、熟語ではその語彙の一文字目が使われる熟語のグループによって記憶される。そのため、同一の単漢字を含む熟語の使用頻度が定着に関連するのである。熟語では音読みを適用していることが多いので、その音を使ったほかの熟語の知識が多いほど、記憶が維持できるということである。高瀬（2015）も使用頻度の高さが記憶維持に重要だと主張するように、語彙・漢字により多く接し、多数の文脈で示すことすることが必要である。

学習ストラテジーとしてもっとも普及している学習方法は反復練習であるが、夛田（2018）や濱川（2016）の調査によると反復練習のほかに、学習者は日本語文章の多読、漢字を使った例文の作成、文脈での使用などを効果的な練習と挙げている。漢字圏学習者も、非漢字圏学習者も自分で学習内容を決めることは効果的だと思っている半面、非漢字圏の学習者は教科書に依存しがちであるとも述べている。しかし、傍島（2018）は教科書への依存が逆に学習者の負担になっていることも指摘している。

以上のように記憶しやすい漢字語彙、定着に有効な要素、長期記憶に移行させるための学習ストラテジーなど漢字語彙の記憶維持には様々な要素が関係している。漢字そのものではなく、語彙としての漢字を習得するには単漢字と熟語の導入の仕方、語彙の選択が重要な観点となることは否めない。

３．研究課題

漢字語彙の学習、定着には様々なことが影響するが、実生活において必要度が高くなる漢字語彙、特に熟語の読みの定着に焦点を当て、学習者が実際に記憶、正しい運用ができている漢字語彙にはどのような要素が関連しているかを調査して、熟語読みの定着につながりやすい要素を検証していくこととした。

具体的には下記の二つの項目に着目してデータを収集した。

①　どのような分野の漢字語彙、学習状況がよく記憶されているか。

②　漢字語彙の記憶はそれに含まれている単漢字の知識と関連があるか。

４．研究方法

海外からの入国が厳しい現状を受け、海外の日本語学習者を対象にオンライン日本語講座を開講した。そのうち初級修了程度のコースに応募した学生５名を対象にテスト形式で調査を行った。予備調査として、日本語学習歴、学習方法を聞き取りした。徳弘（2005）が作成した語彙リストの中から、様々な分野、親密度、使用頻度、難易度の熟語を選択し、10の分野に分け、N5からN3までの語彙を中心にそれぞれの分野で選択し、計60の語彙について調査を行った。学習者の負担を軽減するため、各レッスンで１分野（６問）ずつ、google formsのテストを使用して10回実施した。テストは三つのパートに分かれている。まず、それぞれの語彙について既習かどうか、どのようにして学習したかの調査、二つ目のパートでは該当の語彙の読み方と意味の確認、最後にそれぞれの語彙に使われている単漢字について読み方と使われ方を設問としている。オンラインであるため、読み以外はすべて選択肢としている。調査対象が５名と少ないため、それぞれの学習環境・学習歴等も参照し、定量的および定性的アプローチで収集し分析した。データ収集に関して調査対象者の了承を得ている。

５．分析結果

５.１　参加者の学習環境

５人の参加者の日本語学習年数、学習方法、既習の漢字数、そのうち覚えている漢字数（自己申告）は以下の通りである。

表１　参加者の学習環境

参加者	a	b	c	d	e
学習年数	2	5	8	4	2
学習方法	A	C	C	A	B
漢字習った数	200	1500	2500	400	500
覚えている漢字数	180	800	2000	300	400
漢字維持率	90%	53．3%	80%	75%	80%

（調査データを元に作成）

学習方法

A：何度も書いて覚える

B：見て覚える

C：部首や漢字の構成などを考えて覚える

D：特に何もしていない

学生ａは母国の大学で日本語を教科として学習している。日本語に関して分析して習得する傾向があり、論理的思考が見られる。一度学習したことは比較的よく覚えている。学習年数に対して漢字の習得数は少ない。

学生ｂは日本に研究者として滞在した経歴がある。日本の文化に非常に高い関心を持っており、今度も研究を続けることを希望している。日本語は教科書を使用して学習し、初級を修了している。語

彙力が高く、来日中に習得したと思われる難易度の高い語彙や文法をよく使用するが、その正確度はやや欠ける。

学生ｃは中国語のバックグランドがある。旅行での来日経験があり、日本語は大学で教科書を使って初級を修了しているが。日本のアニメが大好きで口語表現をかなり多く使う。聞いて覚えた語彙・文法が多い。

学生ｄは大学で日本語を教科として学習し、初級、中級まで進んでいる。日本へは大学の研修旅行で３週間姉妹校を訪れている。読解のほうが聴解や会話、語彙より得意としている。発話に時間がかかり、文を構成することを苦手としているが、書かれたものの理解は比較的正確である。

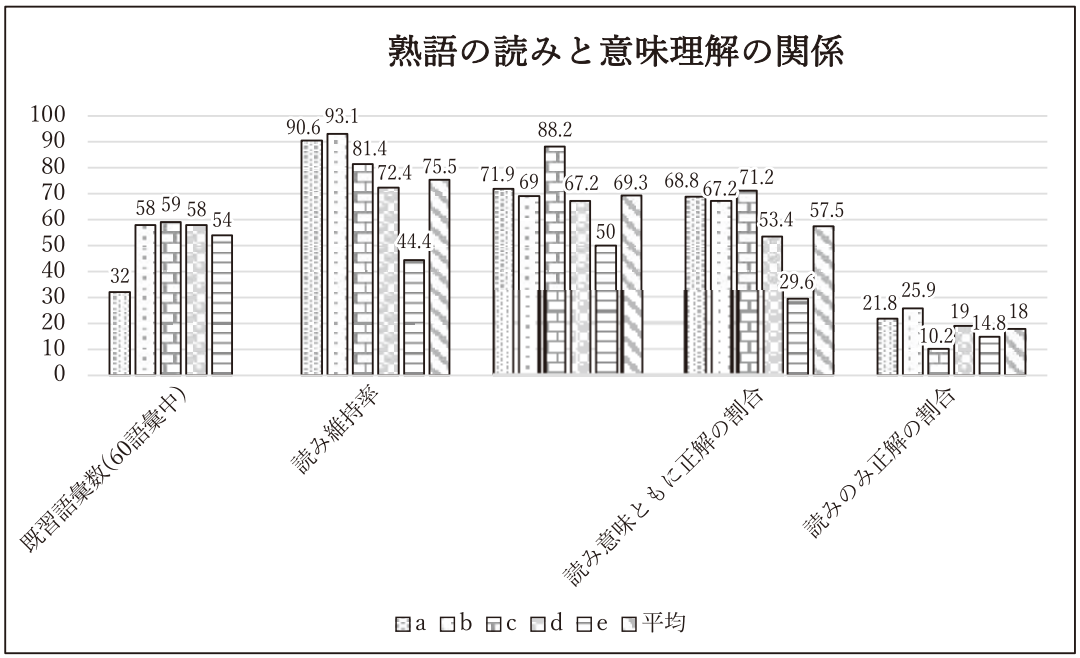
学生ｅは大学で日本語を教科として学習している。学習期間は２年であるが、初級を終わり、中級も少し学習している。日本へは大学の研修旅行で３週間姉妹校を訪れている。聴解や会話は得意としているが、口語表現が多く、語彙文法ともに正確度は低い。

５.２　分野、学習状況と熟語語彙の定着率に関連する項目

５.２-１　熟語の意味と熟語読みの正解率の関連

既習の熟語について読みの正解率、意味の正解率、意味を理解しかつ読めている割合、意味の理解はできていないが読みができている割合を調べ、図１にまとめた。

図１　熟語の読みと意味理解の関係



（調査データを元に作成）

既習漢字、覚えている漢字数の自己申告とテスト結果の集計による維持率を比較すると、学生ａ、ｃとｄはほぼ同じである。学生ｂは推定既習漢字が多いため過小評価したものと思われるが、逆に学

生ｅは過剰評価が見られ、漢字力もほかの学生と比べると低く、正しく自己評価ができていないと思われる。調査した熟語数は全員60であるが、そのうち本人が知らない語彙と申告したものについては計算に入れていない。

熟語読みの正解率と意味の正解率を見ると、学生ａ、ｂ、ｄは読みのほうが意味より正解率が高く、ｃとｅは意味のほうが高い。しかし、読みと意味の正解率の差を見ると、学生ｃ以外は特に大きい差は見られない。この学生は中国語のバックグランドがあるため、意味のほうが理解度が高いかと思われたが、中国の意味と違うものや、日本独自の語が正しく理解しないままで使用していたものと思われる。読み、意味ともに正解している率と読みの正解率を比較すると、その差が大きいのは学生ｂが最も大きく、ａとｃがそれに次いでいる。この差は読みが正解で意味が不正解の率を表している。どの学生もその数値が25%程度以下であることから、既習熟語の25%ほどは意味が正しく理解していなくても読めることを示している。中国語のバックグラウドがある学生ｃについてはその割合が10%と特に低く、意味の理解と読みの正しさの比例度が高いと言える。

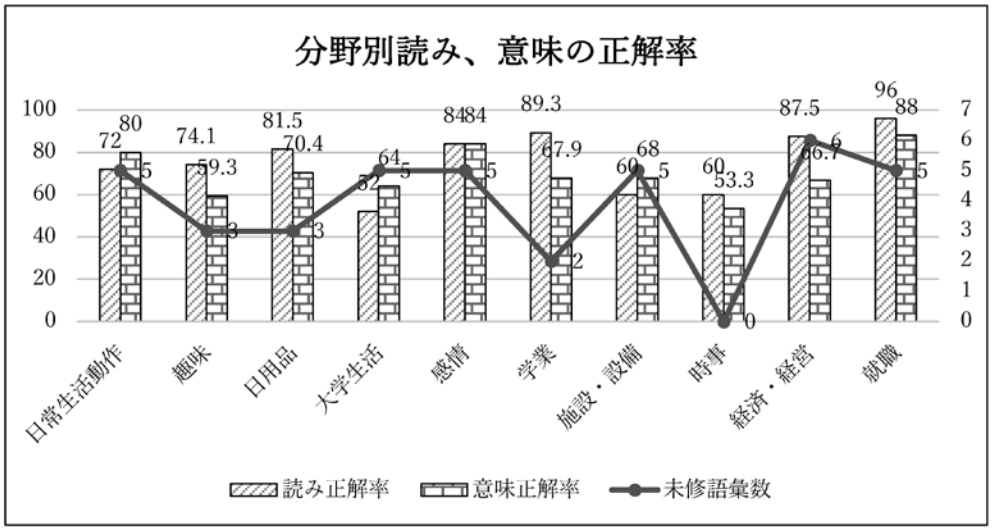
５.２-２　学習方法と熟語語彙の定着率の関連

表１と図１のデータより、学生ｂとｃは漢字の学習方法が部首や構成に焦点を当てて学習していることが維持率の高さに影響を与えているのではないかと思われる。学生ａは学生ｄと同様繰り返し書いて漢字を覚えてきているが、習得数が少ないため、学生ｄよりよく覚えていると思われる。一番維持率が低い学生ｅは漢字を見て覚えると回答している。

５.２-３　分野と語彙の定着率の関連

図２は分野ごとの読みと意味の正解率をまとめたものである。それぞれの分野に６問ずつあり、５名合計で30の語彙が含まれる。そのうちの未修の語彙を除いたものの中で読みと意味の正解率を算出した。

図２　分野別読み、意味の正解



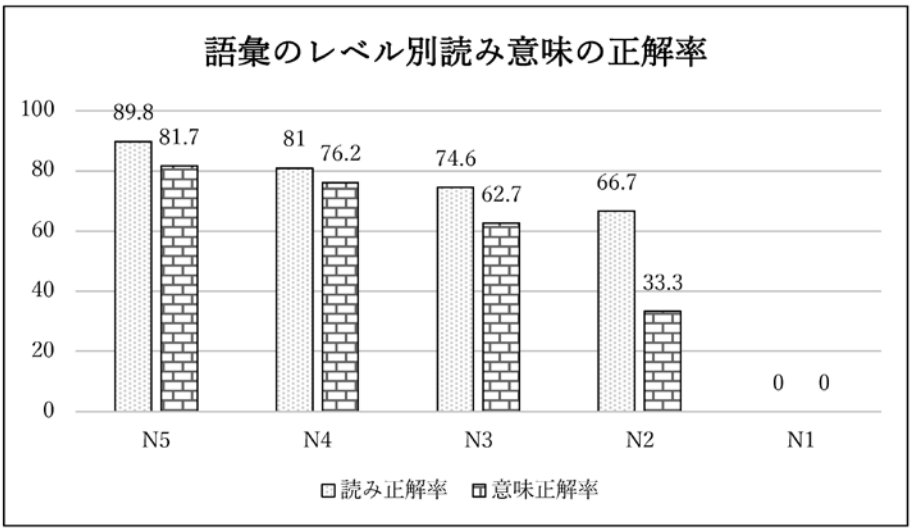
（調査データを元に作成）

読みの正解率が一番高い分野は「就職」で、次いで「学業」となっている。もっとも低いのが「大学生活」である。この項目には「欠席」「遅刻」「選手」など学生生活の用語でおそらく海外で学習する学生はそれぞれの現地語でのみ使用し、日本語で使用することがないのではないかと思われる。同様に「設備」「時事」に関する語も現地語以外ではなじみがないと思われ、正解率があまり高くない。日本の大学に通う留学生であればよく見聞きする言葉であるため、定着していると想像される。環境によって定着語に相違が出ることは容易に推測できる。語彙の意味では、「就職」「感情」「日常生活・動作」の分野が高い数値を示している。読みで低かった「大学生活」は意味ではあまり高いわけではないが、ほかの分野とあまり変わりはない。「設備」についても同様のことが言える。見て理解はできるが､正しく発音する機会がないのでないかと推測される。最も低いものは「時事」であった。「時事」では「文化」「台風」「首相」などニュースでよく見られる言葉を出題している。この項目のすべての言葉が今までに「習った」あるいは「見た」ことがあると回答されており、覚えはあるものの読み、意味ともに定着していないことがわかる。「就職」に関する語には「労働」「将来」「免許」などの語彙が出題されており、難しいと思われたが、教科書などでトピックとして取り扱われやすい分野であると推測される。読みに比べて意味の理解の正確さは分野ごとの差が小さく、単漢字の意味から推測していると思われる。つまり、分野は意味より読みの正確さに関連性が強いことが言える。

５.２-４　語彙の難易度と熟語語彙の定着率の関連

次に熟語語彙の難易度が読み、意味に関連があるかどうか調べた。図３は既習語彙について語彙のJLPTのレベル別に読み、意味の正解率をまとめたものである。

図３　語彙のレベル別読み意味の正解率



（調査データを元に作成）

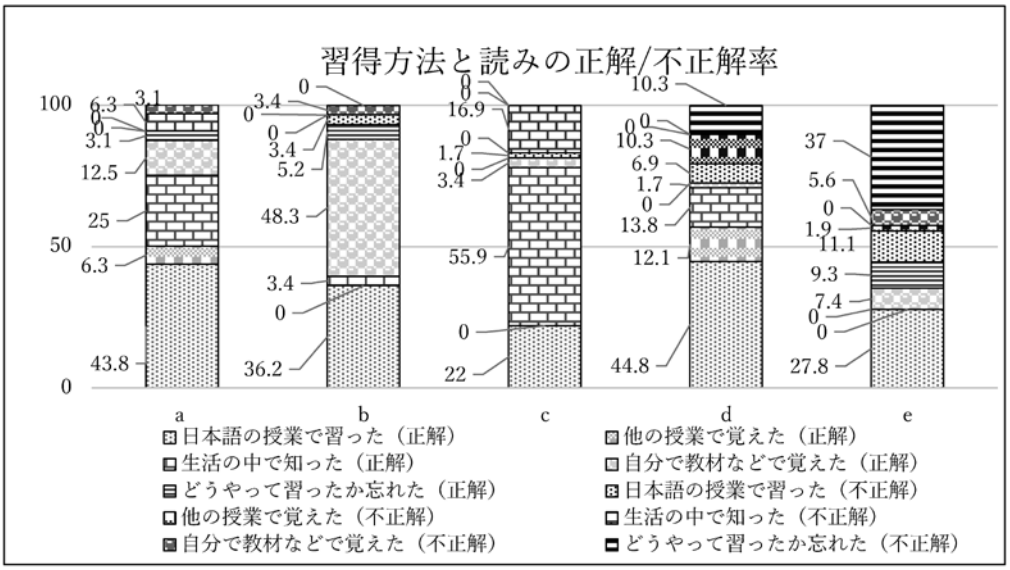
JLPT N3の語彙が調査語彙全体の半数を占めている。N4レベルの語彙はほぼ三分の一、N5レベルは六分の一である。そのうち未修語彙が最も多かったのはN4であった。語彙の読み意味理解ともに

N5レベルの語彙が一番正解率が高いが、読みと意味の正解率の差を比較すると、レベルが上がるにつれ読みと意味の差が大きくなっている。つまり、語彙の難易度によって読みの正解率はある程度左右されるものの、意味の維持のほうが影響されやすいと言える。

5.2-5　習得方法と熟語語彙の定着率の関連

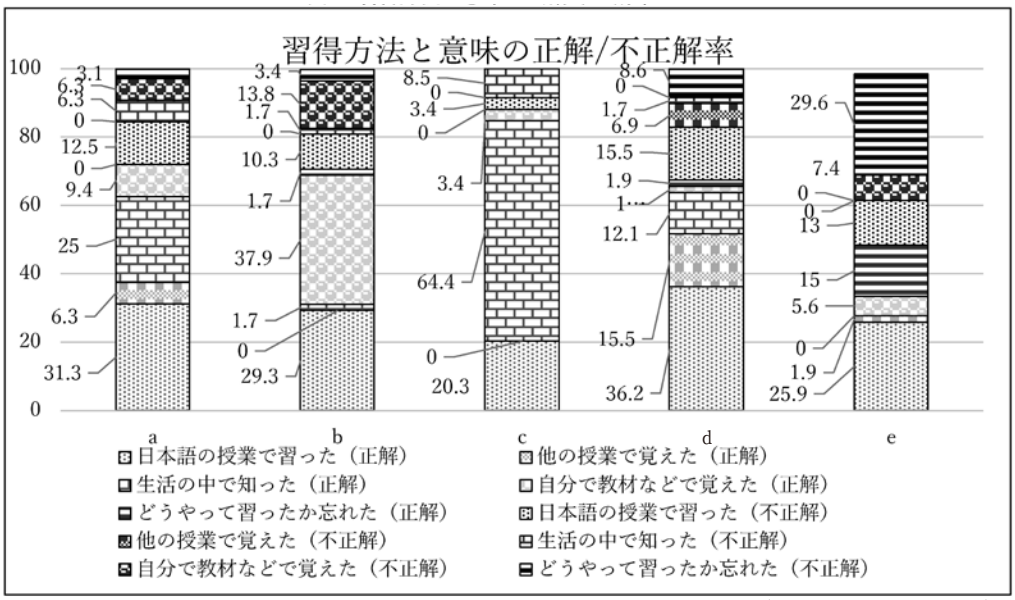
次にそれぞれの語彙をどのように学んだかと語彙の読み、意味の正解率を個人別に算出し、グラフ化した（図４、５）。

図４　習得方法と読みの正解／不正解率



（調査データを元に作成）

図５　習得方法と意味の正解／不正解率



（調査データを元に作成）

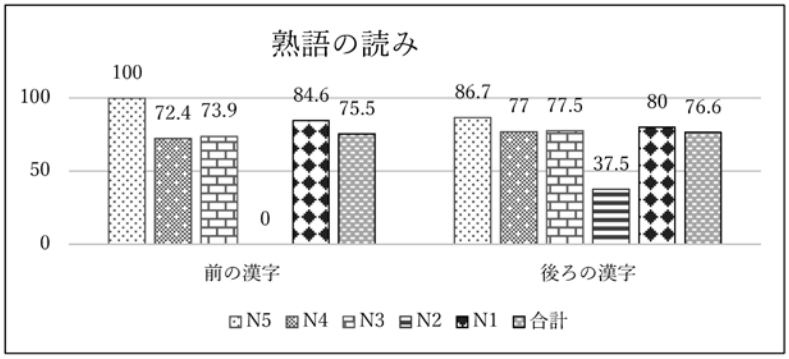
全体的にみると、読みでは日本語の授業で習ったものがどの学生も維持率が高い。次いで生活の中で知ったものであるが、それが多くみられるのは、中国語のバックグランドがある学生ｃである。学生ｂは自分で教材等で調べたものの正解率が高い。意味の理解については学生ｃ以外では、日本語の授業中での習得がみなほぼ同じ正解率を示している。学生ａ、ｄとｅは大学での日本語教科での学習が主な習得であるため、授業で習ったという語彙の定着がもっとも高いが、学生ｂのように日本での経験がある学生は自分で教材などを使い覚えた語彙のほうがより定着していると思われる。さらに学生ｅのデータに見られるように読み、意味の正解率が最も低かった学生は学習経路を覚えていないものがほかの学生に比べて高く、正解率のみでなく不正解したものの中でも学習経路の不明が最も大きい。つまり、どこでどのようにしてその語彙を知ったかの認識が語彙の定着につながると言える。読みと意味の正解率を比べると、どの学生も日本語の授業で習った語彙の正解率は意味より読みのほうが高い。つまり授業で導入された語彙でも、意味のほうが定着しづらいと言える。

５.３　単漢字の知識と語彙の定着率に関連する項目

５.３-１　単漢字の難易度と熟語語彙の定着率の関連

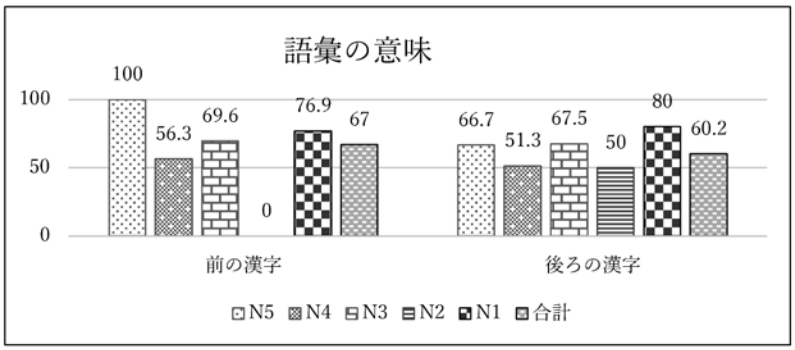
熟語に含まれている単漢字に焦点を当て、各熟語の読み、意味の正解率を二字熟語の前の漢字、後ろの漢字をそれぞれのレベル別に集計した（図６、７）。なお、単漢字のJLPTレベルはJLPT Resources（2017）の漢字リストを参照した。

図６　単漢字レベル別熟語読み正解率



（調査データを元に作成）

図７　単漢字レベル別熟語意味正解率



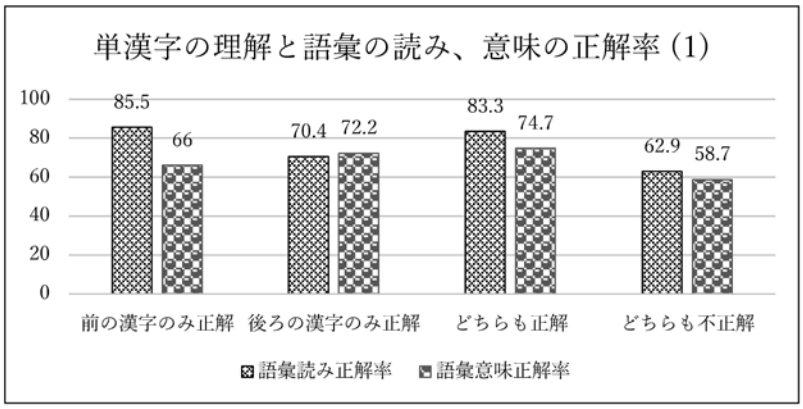
（調査データを元に作成）

熟語の前の漢字の難易度が低いとき（N5レベル相当）語彙の読み、意味ともに100％の正解率を示している。読みに関しては、後ろがN5の単漢字の場合、若干正解率が下がり86.7%である。また、N3、N4レベルの漢字は前、後ろの漢字ともに70％以上の正解率が見られる。N1レベルの漢字は数値は高いがその語彙が既習であるものについて計算しているので、絶対数が少ない。N2についても絶対数が低いため、特に傾向を見ることはできない。つまり、読みに関しては熟語の前の漢字、後ろの漢字に関わらず、漢字そのものの難易度は熟語の読みへの影響は特に高くはないものの、N5レベルのように特に難易度が低いものは語彙の前の単漢字のレベルが語彙の読み力に影響を与えると言える。それに対して、熟語語彙の意味の正解率は単漢字の難易度によって差が見られる。全体数が多いN5、４、３を見るとどれも読みより数値が低く、特にN5の漢字が前にある場合と後ろにある場合では差が大きいことがわかる。熟語の意味については単漢字の難易度の影響が見られるものの、必ずしも難易度が語彙の理解に影響を与えるとは言いがたい。例えば「物価」という語彙は読みについては全員正解しているが、意味はみな不正解である。後ろの漢字の「価」の難易度は高いが、それが影響していると言うよりは「物価」と読めても語彙として正しく理解していなかったと思われる。しかし、単漢字の難易度がある程度熟語意味の理解に影響があることがうかがえる。

５.３-２　単漢字の運用力と熟語語彙の定着率の関連

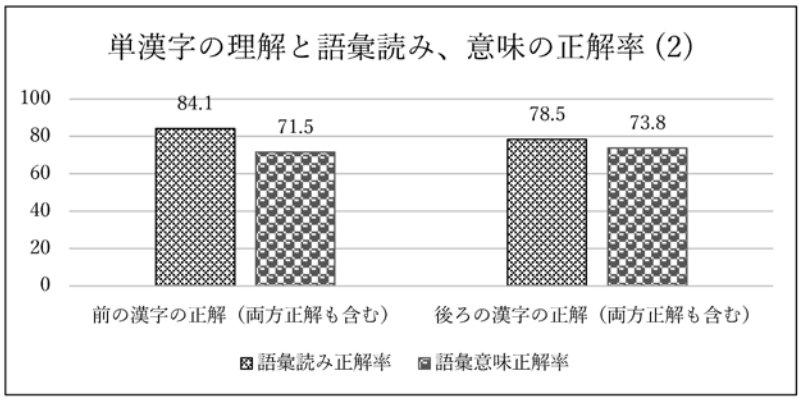
次に単漢字の使い方の理解と熟語の読み、意味の正解率との関連を調べた。図８ではそれぞれの熟語の前の漢字のみ正解している場合、後ろの漢字のみ正解している場合、どちらも正解あるいは不正解の場合をまとめた。

図８　単漢字の理解と語彙の読み意味の正解率（1）



（調査データを元に作成）

図９　単漢字の理解と語彙の読み意味の正解率（2）



（調査データを元に作成）

前後どちらの単漢字の使い方もわかっていない場合でも熟語の読み、意味の正解率は60％近く、どちらの単漢字も正解している場合は読みの方が83.3%と比較的高く、意味は74.7%と若干低い数値を示している。前の漢字のみ使い方が理解できている場合には熟語の読みの正解率は85%程度と最も高い。つまり、前の漢字の使い方を正しく理解していることが熟語読みの定着に貢献していると言える。さらに、前後どちらも正解しているものを前の漢字、後ろの漢字の正解数に合算したもの（図９）を見ても、前の漢字の使い方を正しく理解しているものの語彙のほうが後ろの漢字の使い方の理解より熟語の読みの正解率が高い。逆に熟語の意味については後ろの漢字の使い方を理解しているもののほうが高いが、その差異はあまり大きくない。つまり、単漢字の使い方の理解はそれを含む熟語の読み、意味ともに定着を補助することとなり、その中でも熟語の読みの定着にもっとも関連があるのは熟語の前の漢字を理解しているかどうかであると言える。

６．考察

以上の分析結果を踏まえ、設定した研究課題について議論していく。本研究の目的は熟語読みの記憶維持につながりやすい要素を検証していくことであった。そのために下記の２点についてそれぞれ議論する。本研究では既習の漢字語彙についての読みの定着に焦点を当てているため、自己申告で未習の語彙については集計に含んでいない。

①　どのような分野の漢字語彙、学習状況がよく記憶されているか

②　漢字語彙の記憶はそれに含まれている単漢字の知識と関連があるか

６.１　どのような分野の漢字語彙、学習状況がよく記憶されているか。

まず、熟語の読みと意味に関して、熟語の意味の理解が読みの定着に影響があるかを検証した結果、意味を正しく理解していない語彙に関して低い正解率が見られたことから、語彙の意味の定着を図ることが読みの維持にもつながると言える。

海外の日本語学習者は普段目にする語彙が限られているため、教科書等でのインプットに左右され

がちである。必ずしもやさしい漢字の語彙が維持につながっているわけではなく、教科書等でトピックとして取り扱われた分野が強い。教科書ではトピックとして挙がっておらず、語彙として登場しただけのものは定着が難しく、トピックとして導入されたと思われる語彙は難易度が高くても定着しているように推測される。また、どのように導入されたかどうか覚えていない語彙の定着が特に低いことから、繰り返して読み、意味、使用例を確認する際もどの課、トピックで導入されたものかを再確認させることも定着を補助すると思われる。

６.２　漢字語彙の記憶はそれに含まれている単漢字の知識と関連があるか

熟語の含まれる単漢字に焦点を当てたとき、熟語の前の漢字の難易度が熟語の読みに若干影響を与えており、熟語の前、後ろの難易度はむしろ熟語の意味の理解にある程度関わりがあると言える。また、部首や漢字の構成に着目した学習方法が定着率が高いことから、単漢字の構成とそれぞれの単漢字の意味の学習を効果的に繰り返し行うことが有効であろう。単漢字の使い方の理解がその字を含む熟語の読み、意味ともに維持に貢献していることからも、語彙の学習とともに単漢字の理解も必要となることはあきらかである。特に、熟語の前の漢字が熟語の読みの正解率を高くしていることから、熟語語彙の導入の際、前の漢字を使った他の語を連想させることで熟語の読み、意味の定着につながると思われる。

７．今後の課題

本研究では既習語彙の中でどれだけ語彙が定着できているかに着目した。調査対象が５人と少なかったため、十分なデータを得ることができなかったので、今後同じような調査をする機会があればさらに調査を重ね、今回の結果と同じような傾向が見られるかを検証していきたい。今回はオンラインでの調査となり、その特性から熟語の意味のテストでは選択肢を使用したため、惑わされやすい選択項目もあったと思う。熟語を使って自由に文を作るなど、創作的なテストをすることができれば熟語の正しい使い方の把握も可能だと思われる。今後海外とオンラインでつないだ授業の需要も見込まれることから、学生の漢字語彙力、各自の学習内容、習得状況をより確実に把握する方法を模索していく必要がある。

参考文献

JLPT Resources. (2017). Kanji List. http://www.tanos.co.uk/jlpt

Paxton, S., & Svetanant, C. (2014). Tackling the kanji hurdle: Investigation of kanji learning in non-kanji background learners. International Journal of Research Studies in Language Learning, 3 (3), pp.89-104.

Rose, H. (2013). L2 Learners' Attitudes Toward, and Use of, Mnemonic Strategies when Learning Japanese Kanji. Modern Language Journal, 97 (4), pp.981-992.

Shimizu, H., & Green, K. E. (2002). Japanese language educators' strategies for and attitudes toward teaching kanji. The Modern Language Journal, 86 (2), pp.227-241.

愛甲瑞枝 (2021).「非漢字圏の日本語学習者の熟語音読力の向上にむけて－ 漢字知識と文脈活用の実態との関連 －」, JSL漢字学習研究会第88回研究会zoom開催, 2021年6月19日.

有山優樹・落合知春 (2012).「『何ができるか』という視点に基づく漢字学習：漢字学習ストラテジーの習得を目指して」, JSL漢字学習研究会誌 (4), 14-18頁.

加地雄一 (2012).「未知漢字の記憶における書字動作の効果」, 日本教育工学会論文誌, 36, 1-4頁.

加納千恵子 (2016).「〈報告〉学習者による漢字力の自己評価について :漢字クラスのレベルによるCan-do statements 調査結果の違い」, 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集, 31, 95-106頁.

栗原由加 (2019).「日本語学習者の漢字習得プロセスについて考える－タイの非漢字系学習者1 へのアンケート調査を通じて－」, 神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要, 4, 17-28頁.

国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2009).「新しい『日本語能力試験』ガイドブック」, https://www.jlpt.jp/reference/pdf/guidebook_s_j.pdf, 2020年12月25日.

傍島佳奈子 (2018).「非漢字圏出身日本語学習者の漢字学習とその動機付けに関する研究」, 愛知教育大学大学院平成29年度修士論文抄録, 1-7頁.

高瀬利恵子 (2015).「留学生に対する漢字学習の効果の検証」, 中日本自動車短期大学論叢, 45, 41-48頁.

夛田美有紀.(2018).「デジタル時代における漢字教育のあり方－ARCS モデルによる中級II漢字の改善を通して－」, 長崎大学国際教育リエゾン機構紀要, 4, 1-13頁.

徳弘康代. (2005).「中上級学習者のための漢字および漢字語彙学習資料の開発」. 講座日本語教育, 41, 41-63頁.

徳弘康代 (2007).「表出能力を伸ばす漢字語彙学習の実践」, Web版日本語教育実践研究フォーラム報告, 1-10頁.

富沢定利 (2013).「日本語における漢字の存在とその考え方の考察」, Paper presented at the Central Association of Teachers of Japanese.

豊田悦子 (1995).「漢字学習に対する学習者の意識」, 日本語教育実践研究論文集, 85, 101-113頁.

濱川祐紀代 (2016).「漢字教育の実践と学習の方法論－長期記憶によるつながりを踏まえて－」, (博士), 埼玉大学大学院文化科学研究科.

藤田正・山口鮎美 (2011).「中上級学習者に対する漢字学習ストラテジー －セルフ・フィードバックの活用に向けて–」, 教育実践総合センター研究紀要 (20), 129-135頁.

方的中 (2016).「日本語の漢字語彙教育における文脈化指導の方法」, 日本語教育実践研究論文集, 73-79頁.

柳田しのぶ (2011).「非漢字圏日本語学習者における漢字学習への意識:フランスの大学生を対象に」, JSL漢字学習研究会誌, 3, 8-13頁.

中村かおり (2019).「非漢字圏学習者の負担を軽減する 漢字指導の試み」, 拓殖大学日本語教育研究, 4, 31-54頁.

中村嘉宏 (2011).「語彙習得の諸相」, 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 15, 35–54頁.

山田真悠子・牧岡省吾・玉岡賀津雄 (2012).「漢字熟語の再認記憶における文脈変動性の効果」, 認知心理学研究, 9 (2), 115-124頁.

大和祐子 (2019).「日本語学習者の二字漢字語の書字認知の特徴」, 日本語・日本文化, 46, 21-45頁.